

大雨の網走と、ファミレスのハンバーグ

街の中心地というのは、いわゆる駅前を指すものだと思て疑っていなかった。リヴァイの生まれ育った東京の西側地域といえ、そこそこの規模の駅周辺はどこも栄えている。もちろん街にもよるが——駅ビルやショッピングモールが併設されていたり、居酒屋や飲食店、カラオケ店などがひしめきあっていたり。小さな駅だとしても、コンビニやちょっとした喫茶店などはあるものだと思ひ込んでいたのだ。

ところが、一人旅をするようになってその認識は間違っているを知った。駅を中心に人が移動するのは都会だけなのだ。地方では、どこかに行くときは車を使う。駅前よりも国道沿いのほうが、ずっと栄えている。

大粒の雨が、道路にぶつかる音が聞こえる。

雨はまだ、止みそうにない。

釧路と同じく、網走駅前にも店やコンビニはなかった。ベッドに寝そべりながらGoogleマップを開く。国道沿いに大型のショッピングモールがあり、そのあたりを中心に賑わっているようだ。しかし、徒歩で行けるような距離ではない。

さすがに腹が減った。散歩がてらコンビニにでも行くか——二日連続だが仕方がない。リヴァイは立ち上がり、デスクに置いたメガ

ネを掛けた。コンビニまで、大雨の中を一〇分程歩くことになるが、ビジネスホテルの狭いベッドに寝ているよりはずっと良い。多少濡れたところで構わない。明日の列車が動くまで、特に用などないのだから。

*

ホテルを出ると、昼間よりは雨足が落ち着いているように思えた。傘を差し、駅とは反対の方向に歩きだす——すると少し離れた場所に、ネオンの光る看板がくると回るのが見える。一瞬、そういったエリアがあるのだろうかと思ひとした。

再びGoogleマップを開く。ネオンの正体は——なんてことない、全国どこにでもあるチェーンのファミリレストランだった。昨日の昼に駅を降りた時には、バスを探すのに必死で気がついていなかったらしい。リヴァイは引き寄せられるように、その店の方向へと歩いて行った。

「いらっしやいませ」

店のドアを開くと、暖かみのある明かりに包まれる。赤と白のストライプ柄の制服に身を包んだ女性店員が、リヴァイに声を掛けた。

「一名様ですか？」

「ああ、一人だ」

二二時の店内を見渡す。ほとんど客はいないようだ。

新聞を読みながらビールを飲んでいるオッサンが一人。かなり出来上がっている様子で、すでに長居をしているのだろう。その近くには、三〇代か四〇代くらいの女性三人組が話に花を咲かせていた。同僚か、あるいはママ友グループだろうか。

女性店員は、久しぶりに訪れた客にニッコリと笑うと、「お好きなお席どうぞ」と言った。リヴァイは、オッサンとも女性グループとできるだけ距離を取れるよう、窓際のボックス席に腰を下ろした。「お決まりになりましたら、ボタンでお知らせください」

イチオシはハンバーグ・ステーキのようで、メニューには様々な種類のハンバーグの写真が並んでいる。ファミレスに来たのなんて、何年ぶりだろうか——メニューのページをめくりながら、ふと思いつく。

社会人になりたての春、研修終わりに同期で何度か食事に行った。確か、研修所の近くにファミレスがあったのだ。まだ配属先すら決まっておらず、これから始まる社会人生活に希望も不安もたくさん持っていた頃。

皆、思い思いのメニューを注文した。まだ金がなかったから、比較的安いメニューを頼む奴が多かったように思う。ポテトフライ、ミートソースパスタ、マルゲリータピザ、唐揚げ定食にカレーライス。若者が好きそうな食べ物ばかり。テーブルには所狭しと様々なメニューが並んだ。高校生のようにドリンクバーをお代わりしまく

る奴もいた。リヴァイはいつもハンバーグを頼んでいた。ファミレス以外では、あまり食べる機会がないような気がして。

そういった集まりになると、必ずリヴァイの横をキープする同期の女子がいた。綺麗な黒髪のロングヘアに目鼻立ちのはっきりとした顔立ちの美人で、同期の男子の間ではちよつと人気があったから「リヴァイは良いよなあ」とよく揶揄われた。彼女はリヴァイの横でいつもチョコレートパフェをおいしそうに食べ、リヴァイもまた、その姿を可愛いと思っていた。

テーブルに置かれたボタンを押す。すると、すぐに先程の若い女性店員がやってきた。深夜だからだろう、ホールに他に店員はいないようだ。

「お決まりですか？ ご注文をお伺いします」

女性店員は、リヴァイに向かって笑顔を向ける。クリっとした瞳と、後ろで一つに結んだ黒髪が印象的な女だ。年は二〇歳くらいに見える。学生のアルバイトだろうか。こんな雨の日の深夜に、女性が一人でホールを回すのは危険もあるだろうとリヴァイは思った。現に、酔っぱらいのオッサンも店内にいる。

彼女がもう一度ニコツと笑ったのをきっかけに、リヴァイは思考の中から抜け出した。メニューの一頁目の写真を指差す。

「この目玉焼きハンバーグと、ライスを」

そう言うとき心なしか、女は僅かに口角をあげたような気がした。

「かしこまりました」

「それから、ドリンクバーをお願いします」

「目玉焼きハンバーグとライス、それにドリンクバーですね」

復唱された内容に軽く頷くと、マニュアル通りに頭を下げて店員は去っていった。

やがて配属が決まり、全国に散らばっても、年に一度は同期会が開催された。会場はファミレスではなく、少しずつ良い店になっていったと記憶している。チョコレートパフェの彼女は、配属先の先輩との間に子どもができ、のちに寿退職したと聞いた。

三〇歳を迎えた入社八年目、同期会は開かれなくなった。出世した奴、そうでもない奴、地方を転々としている奴、転職した奴、家庭を持った奴。一緒にスタートダッシュを切った仲間たちは、それぞれのスピードで、それぞれの人生を歩むようになった。同期会どころではなくなったのだろう。

あの頃、それぞれがファミレスで好きなメニューを注文したように。

ドリンクバーでウーロン茶を注いでいると、先程の女性グループがお喋りをしながら帰っていくのが見えた。レジの前で、それぞれが食べたものを支払っているように会計にはそれなりに時間を要している。

先程の店員は、笑顔を絶やすことなく対応していた。

*

鉄板に乗った俵型のハンバーグは、ジュワジュワと良い音を放ちながら運ばれてきた。

綺麗に焼かれた真ん丸の目玉焼きの上に、デミグラスソースがたっぷりとかけられている。その横には、申し訳程度の野菜として、ブロッコリー、ニンジン、そしてコーンが添えられている。これで栄養が補えるとは到底思えないが、リヴァイはこのコーンが結構好きなのだ。横に置かれたライスからは湯気が立っている。さすがに食欲をそそられる。昨夜コンビニのおにぎりを食べて以来、何も口にしていなかった。

リヴァイは、テーブルの端におかれたケースからフォークとナイフを取り出すと、小さな声で「いただきます」と呟く。目玉焼きの上からナイフで切り込みを入れると、半熟の卵がとろけ出した。ハンバーグを一口サイズに切り、目玉焼きと一緒に口に入れる。

うまい。特別に良い肉を使っているわけでも、凝ったソースがかけられているわけでもない。が、まさしく誰もが期待するような、ファミレスらしいハンバーグの味がした。

食事をしながら、監獄にも食堂があつたなと思ひ出す。

昨日、「博物館 網走監獄」の帰りがけに、監獄食堂と書かれた店があるのを見つけたのだ。あいにく雨で寄り道どころではなかったのだが、その店では獄中の囚人の食事を表現したメニューが食べられるとうたっていた。あの時、時間があつたとしてもその店で食事をする気にはなれなかっただろうと思う。「博物館 網走監獄」は、リヴァイにそれなりの衝撃を与えていた。

鉄板の熱はいつの間にか落ちて着いていた。ハンバーグは美味しく、俵型のハンバーグ二つをあつという間に食べ終えてしまう。そういえば、釧路でも鉄板にのつた「スパカツ」を食べた。リヴァイは普段、脂っこいものをあまり食べないが、この旅に出てからは少し体重を増やしたかもしれないと思う。明日の朝、もし晴れていたらそのあたりを走ろうか。網走川沿いを走るのは気持ちが良いかもしれない。

そんなことを考えていると、「お済みのお皿をお下げてよろしいですか？」と、先程の女性店員が声を掛けてきた。

ご馳走さまですと答え、使い終わった食器とグラスをテーブルの端のほうへ寄せる。

「お客様は、観光ですか？」

女性店員は、ドリンクのグラスを下げながらサラッと尋ねた。リヴァイは、返答するのにワンテンポ遅れてしまった。深夜のファ

ミリーレストランで、店員に話しかけられると思っていなかったのだ。

「まあ、そんなところでず」

答えると、彼女はニコツとした。そこで初めてまともに目が合った。クリツとした瞳は黒目がちで、愛嬌のある女だとリヴァイは思った。端的にいうと、とても可愛い。なぜか、小さな時に近所で飼っていたチワワを思い出した。女性店員はテーブルを片付けながら話を続けた。

「監獄にはもう行きましたか？」

「はい。昨日、行ってきました」

「どうでしたか」

クリツとした瞳が、リヴァイを捉える。

どうでしたか――。なかなか難しい質問だ。

「想像していたより、ずっと悲惨な環境だと思いました」

ありきたりな感想を述べる。店員は、そうでしょうね、といった様子で頷くと「他にどこか観光はされましたか？」と聞いた。監獄以外にも一応、オホーツク流水館とか色々あるんですよ、と。

「いや、この雨でずっとホテルにいました。本当は昼の列車で旭川に発つつもりだったんですが、運休になってしまつて」

ホテルも一泊延泊することになったんです、と伝える。

「そうだったんですね。じゃあ、今日は退屈したんじゃないですか」

「ずっとテレビを見てました。北海道放送。なかなか面白かったですよ」

「そうですか？ 私、最近はYoutubeしか見なくなっちゃいましたね」

若者らしい回答が返ってくる。

それから二人は同時に、窓の外を見た。雨足が弱まっている気がするが、暗くてよくわからない。

「こんなに雨が降ることはあまりないんですが……せっかくのご旅行なのに残念でしたね」

「網走の思い出は監獄だけになってしまいました」

元々それが主目的なのだから、リヴァイはさほど気にしていなかった。けれども、彼女は少しだけ悲しそうな表情をした。

「いや、」だからリヴァイは慌てて付け足した。「今、深夜のファミレスも追加されました」

彼女はまた、ニコツと笑った。

「なら良かったです。二三時まで営業しているので、ゆっくりしてゆっくりくださいね」

*

ゆっくりと言われても、特にすることもない。かといって、ホテルに帰ったところでテレビを見て寝るだけだ。閉店まではあと三〇

分ほど。ドリンクバーでコーヒートを注ぎ、これを飲んだら帰ろうと考える。

しばらくすると、再び女性店員がテーブルの近くに来了。ラストオーダーの時間となるらしい。特に追加注文はないと答えたものの、彼女はテーブルの脇に立ったまますぐに去る様子がない。特にすることもないリヴァイは、なんとなく話しかけてみることにした。

「お姉さんは、地元の方なんですか？」

「はい。生まれも育ちも網走です」

恥ずかしそうに、しかし誇らしげにそう答えた。その表情は、先程の接客用の笑顔よりもずっと自然で、リヴァイは好感を抱いた。思わず、敬語を使うのを忘れてしまうほどに。

「学生か？」

「いや、学生ではないんですけど……社会人って言えるのかな」

「？」

「去年大学を出て、札幌の会社に就職したんです。って言っても、本当に小さな会社の事務仕事だったんですけど」

「そうか」

「はい。でも、一年でこっちに帰ってきちゃいました」

「ほう」

「ずっと都会に憧れてたのに、地元に戻ってきてしまったんです」

「……仕事はキツかったですか？」

急に自分のことを語り出した女に、リヴァイは少しだけ戸惑った。どの程度、踏み込んでいいのかわからなかったからだ。

控えめに質問をすると、彼女は首を横に振った。

「そういうわけでもないんですけど」ため息をつく。「なんか、しゃくりこなかったんです」

リヴァイは何も言わずに頷き、話の続きを促す。

「会社の人は皆いい人たちで、仕事もそれほど大変でもなかったんです。だけど、なんというか……自分でもよく分からないんです。空気が違ったというか」

「空気？」

「はい……朝起きたときの空気の冷たさとか、街に流れる時間の速さとか、ご飯の味とか。あんなに憧れてた都会の暮らしだったのに、なんだか違った。働いていても、家に帰っても、友達と遊んでいても、流水の上を歩いてるみたいな不安定な気持ちでした」

「……」

「一人暮らしも寂しかったんです。彼氏とか作ったら紛れるかなと思っただけど、そうでもなくて」

「別れちゃったのか」

「はい。最低だったと思います」

「いや、そんなことはないと思うが」

俺だって別れた女の五人や一〇人いる……と言おうとして口を噤んだ。今はそういう話ではない。女は言葉を続けた。

「それで地元に戻ってきて——高校生の時にバイトしてたこの店で、とりあえず働かせてもらってるんです。まだ、これからどうしたいか分からなくて」

「そうか」

「はい」

「ずっと都会に憧れてたんです、本当に。それに、東京や大阪に出て、働いたり結婚している友だちだっている」

「……」

「網走に帰ってきてホッとしているけど——なんで皆が普通にできることが、私にはできなかったんだろうって思ったりします」

なんと答えようかと、リヴァイが思考を巡らせた瞬間だった。店の反対側から、大きな声がした。

「おい、姉ちゃん！ お会計！」

気づくと、閉店の二三時まであと数分となっていた。酔っ払いのオッサンの酔いはまだ冷めていないようで、随分とふらつきながら歩いている。彼は伝票をもってレジのほうへ向かっていた。

「あのオッサン、まさか車じゃねえだろうな」

「あの方はこの辺の人なんです。いつも徒歩なんですよ」

彼女は元気に「はい」と言って、レジのほうへ向かった。

*

二三時。スマホに標準装備された天気予報では、網走の現在の天気は「曇り」となっていた。雨は止んだのだろうか。窓の外を見てみても、やはり暗くてよく見えない。

リヴァイはレジで伝票を差し出し、ご馳走さまでしたと言った。

彼女はきまり悪そうな顔で、リヴァイを見る。

「すみません。さっき、つい喋りすぎてしまっただけ」

「構わねえが」

「お客さんに、個人的な話をしてしまいました」

「いいんじゃないか。誰かに話したくなる夜もあるだろう」

そう答えると、彼女はほっとしたように笑った。やっぱり、近所で飼っていたチワワを思い出す。小学生の頃、あの子犬が可愛くて仕方なかったのだ。

「お兄さんは、東京の方ですか？」

「ああ、東京だ」

「そうなんですね。行ってみたいな、東京」

「すぐだ。飛行機で一時間半もあれば着く」

「そっか」

「それから、お兄さんって年でもねえ。もう三〇も半ばだ」

そう言うと、彼女は驚いた顔をした。

「二〇代に見えますよ。同じくらいか、少し上くらいかと思った」

「おだてても何も出ないが」

彼女はハハッと笑い、「一六四〇円です」と言った。

タッチ決済のできるクレジットカードをかざすと、静かな店内にピツという音が響く。決済完了だ。

女は何か言いたげな表情でレシートを渡す——少しの沈黙のあと、口を開いた。

「お支払い完了です。ありがとうございます」

「ああ。ご馳走さまでした」レシートを受け取り、丁寧に財布にしまふ。「もう遅いから、気をつけて帰れよ」

ファミレスのドアを開けると、雨はようやく止んでいた。夏だというのに冷たい空気が身を包む。暖かい店内で頬が火照っていたから、このくらいの気温が気持ち良い。ホテルに帰ったら、歯を磨いて、シャワーを浴びて寝るだけだ——そう思って、ちょうど歩き出した時だった。

「あの！」

振り返ると、先程の女が立っていた。

「明日、列車が動いたら帰るんですよ？」

リヴァイは驚いた。「……そのつもりだが」

「網走港に、少しだけ夜景がきれいなところがあります。こんな、何もない街なんですけど、せつかく北の果てまで来てもらったのに」

「……」

「店はもう閉店するし、車で来ているので」

「……」

「もし良かったら、一緒に行きませんか？」

ファミレスの脇の駐車場には、車が数台停まっていた。二三時過ぎ、もちろん誰かがいるはずもなく、辺りは静まり返っている。

リヴァイは、店の外に飛び出してきた彼女を見る。赤と白のストライプ柄の制服。胸につけたネームプレートには、苗字が書かれていた。

「下の名前は」

「え？」

女は聞き返した。聞き取れなかったわけではなさそうだ。彼女が少し照れた表情になったのは、暗い駐車場でも分かった。小さな声で「レイナです」と答えた。

*

レイナの車で一〇分ほど進み、辿り着いたのは小さな公園だった。「標識も出てないし、たぶん地元民じゃないと辿り着けないと思います」

「そうだろうな。暗い山道をずいぶん器用に走る」

街灯もほとんどない山道を、彼女はスイスイと運転してきた。リヴァイも運転は得意なほうだが、彼女の運転の上手さには感心した。「小さいけれど見晴台があって、網走港が見渡せるんです」

入口に車を止め、二人は公園の中へ入っていく。深夜の公園は、まだ雨の匂いがした。

私服に着替えたレイナは、店の制服を着ているよりずっと大人っぽく見えた。一つに結んでいた髪をほどき、ラフな雰囲気黒いカットソーにタイトスカートを。特に着飾っているわけではないのだが、店にいるときとのギャップにリヴァイは少し驚いた。

見晴台に上ると、視界が急に広がったのを感じた。目の前には真つ暗な海が広がっている。ところどころに、キラキラとした光が見える。停泊している漁船やフェリーの灯りらしい。少し遠くには、小さな塔のようなものが見えた。塔の窓から海に向かって、一本のじんわりとした光が差している。

「あれは灯台。けっこう綺麗でしょう？」

「ああ。綺麗だな」

真夏といえども風が冷たい。しばらく並んで夜景を見ていたが、リヴァイが「寒いな」と言ったのをきっかけに、見晴台のベンチに腰掛ける。雨上がりなので濡れているのではないかと手を触れてみたが、大丈夫そうだ。

見上げると、見晴台には三角屋根がついていた。

レイナはリヴァイを質問攻めにした。東京のどこから来たのかとか、仕事は何をしているのかとか。今回の北海道の旅で、一番気に入った街はどこかと聞かれて困ったが、「まだわからねえ」と無理に答えておいた。

「お仕事は休んで旅行してるんですか？」

「勤続一〇年の特別休暇だ。一〇日間休める」

リヴァイが答えると、彼女は「一〇年も働くななんてすごいなあ」とため息をついた。

その様子を見て、リヴァイはフツと笑った。

「なんですか？」

「いや、大した話じゃねえんだが」軽い口調で話を続ける。「俺は、二〇代は仕事ばかりしていて、気づいたら趣味も何もないまま三〇になっていた」

「へえ」

「それで趣味を持とうと思って、一人旅をはじめたんだ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。有給を取っても念入りに掃除をするくらいで、何をしていいか分からなかった。遊び方がわからないっていうのか。若い時に、もっと色んなことに興味を持ったり、経験を積んでおけばよかったと思うことは山ほどある」

「……」

「が、今からでも遅くないとも思っている」

「そうですね。遅くないと思います」

「レイナもな」

「え？」

「地元でエネルギーを溜めて、また都会に出たくなったら挑戦すればいい。札幌でも、東京でも、大阪でも。一度、思うように行かなかったからって、諦めることはない」

意表を突かれたようで、彼女は驚いた顔をした。話が自分のところに戻ってくると思っていなかったのだ。レイナは何も言わず、リヴァイを見つめていた。

「それから」彼女の反応を待たず、リヴァイは話を続けた。「さっき話した通り、今日は一日中部屋にこもっていた。窓から外を見ても大雨で、ずっと冴えない気分だった」

「はい」

「店に入って、レイナが笑顔で対応をしてくれて、食い物は温かくて」

「……」

「綺麗な夜景を見れた。冴えない気分どころか、割と良い感じの一日になった。感謝する」

「そんな。大したことしてないですよ」

「……」

「すまん。さっき話してくれたことに上手いアドバイスは見つからねえんだが」

リヴァイが、慎重に言葉を選びながら話すと、レイナはにつこりと笑った。

「充分ですよ。ありがとうございます。リヴァイさん」

はにかんだような笑顔が可愛くて——リヴァイはなんとなく話題を逸らしてしまった。

「客を車に乗せることはよくあるのか」

「え？」

「深夜に男を車に乗せるなんて、随分手慣れている」

言いがかりをつけられたレイナは、頬を膨らませて反論した。

「言い方！ お客さんに乗せたのなんてこれが初めてですよ！」

「そうなのか」

「そうです」

「気をつけろ。妙な男に襲われたあげくに身ぐるみ剥がされて、オホーツク海に沈められても文句は言えねぞ」

「妙な男なんて乗せないし……」

「そうか」

「それに、そういうのって日本海なんじゃないですか。火曜日のサペンス劇場みたいなやつ。オホーツク海が舞台になることなんてまずないですよ」

確かに、とリヴァイは言った。「日本海は荒れ狂うようなイメージがあるからな。火サスにちょうどいいんだろ」

「日本海、見たことがありますか？」

「ある。新潟の海に行った」

「どうでしたか？」

「思ったよりも穏やかだった」

「へえ、見てみたいな」

「そうか」

「はい」

「話が逸れたな」

時折、波が折り返す音が聞こえる。海に縁がなく育ったリヴァイにとって、深夜に波の音を聞くのは初めてだった。

「——私、手慣れてないですよ。こんなふうに人を誘ったのは初めて」

「ほう」

「本当です」

「網走観光大使としてほっとけなくなったか」

「別に、観光大使のつもりもないです」

「……」

「その、なんというか」

「……」

「ええっとなんか、かつこいいなあって思ってしまった。そしたら目玉焼きハンバーグなんていうから、可愛いなと思って」

メニューの一番上に、デカデカと写真を載せているのだ。目玉焼きハンバーグを注文する奴は多いだろう。リヴァイが反論する前に、彼女は続けた。

「もう少しお話してみたいなと思ってしまったんです」

「そうか」

「はい」レイナは恥ずかしそうに——しかし吹っ切れたかのように続けた。「明日、列車が動いて網走を出たら、きっともう二度と会うことはないから」

「わからねえ。また来るかもしれないだろうが」

「わかります」

彼女は、リヴァイのほうを向いて言った。

「札幌や函館を何度も旅行する人はいるけど、網走に何度も来る人はいないです。みんな、一度だけ。監獄なんて二度見るものでもないし」

否定はできない。観光地とはそういうものだ。一度訪れて良い場所だと思っても、短い人生の中で何度も訪れる場所というのはそう多くない。

「……リヴァイさんは、彼女はいないんですか？ だから一人旅？」

あまりに直球な質問に、リヴァイは苦笑したくなった。「まあ、そんなとこだ」

「旅は何日目ですか？」

そう言われ、リヴァイはここまでの行程を脳内で振り返る。

「五日目だな」

「全部で何日？」

「七日の予定だ」

「ふうん……じゃあ、すこし寂しくなってきた頃ですね」

「そうだな」

「寂しくなったらどうするんです？」

「どうもしねえよ」

「そうしたら、今夜だけ彼女にしてくれませんか」

レイナは、膝においていたリヴァイの手を取ると、ぎゅっと握った。

もちろん意表を突かれたが、それを顔に出さずに——リヴァイは話を続けた。彼女の願いには答えずに。

「『Traveler』って小説を読んだことがあるか。男一人で、海外を旅する有名なエッセイだ」

ベストセラーになったこともある本のタイトルを告げるも、レイナは知らないと言った。世代の違いというやつだろう。

「刺激的な旅だ。日本を出発して、香港、台湾、中国と東アジアを回る。そこから、東南アジアへ南下し、南アジア、中東を回る。バスや電車は来ねえし、盗難なんかのトラブルも多い。衛生面にも問題があり、病気になったりもする」

「すごい旅」

「ああ。毎日がめまぐるしくて活気のある旅だ。面白くて、こちらものめりこむように読み進めた。だが、ヨーロッパに入った途端、文章のテンションが変わる」

ヨーロッパ入りと同時に、冬が訪れたのも大きな原因かもしれない。それまでの旅が刺激的すぎたのかもしれない。観光すべき場所はあるはずなのに――宿のベッドから起き上がれない日も続いた。一人ぼっちの旅に、寂しさを感じ始めたらしい。そう説明すると、レイナは不思議な顔をした。

「それで、主人公はどうするんですか？」

「旅先で出会った女と寝るようになる」

「へえ」

「魅力的な男だったらしい。旅先で出会った、何人もの女を抱く。その瞬間だけは、寂しさが紛れるからな」

「……」

「だがな。そのうちに、いくら女を抱いても満足しなくなる。結局、主人公は自分が旅に飽き始めていることに気づく」

「……」

「男なんてそんなもんだ」

目の前には海が広がっている。暗闇の中で、一匹のカモメが飛んでいるのが見えた。

「大事にしろ。家族と住んでるんじゃないのか」

「友だちの家に泊まることはよくあるので、平気です」

「そういう問題じゃねえだろ」

公園の時計が、○時を指していた。レイナはリヴァイのほうを向いた。

「ダメですか？」小さな声で呟く。「網走の夜は、きつと一度だけ」

リヴァイは、レイナの背中に左手を回し、肩を抱いた。

彼女は一瞬だけビクツとしたものの、少しだけ体をリヴァイのほうに寄せた。肩に回した左手に力を込めてレナを引き寄せると、そのまま唇にキスを落とした。チュツと触れるだけの優しいキス。

彼女の唇は熱かった。

「ハンバーグの味がする」

「かもな」

一度顔を離すと、レイナはクリッとした瞳をぼったり開けて、リヴァイを見ていた。目が合う。

その表情がやはり可愛らしく思えて、リヴァイは彼女の白い頬に唇を落とした。

「かわいいな」

レイナは何も言わなかった。リヴァイは彼女の黒髪をゆつくりと撫でると、後頭部に手を当てて再びキスをした。彼女の唇をなめるようにこじ開け、舌を入れる。今度は深いキスだ。

すると照れているのを隠したいのか——彼女は、キスしながら言葉を発した。

「コーヒーの味もする」

「レイナ」

「え？」

「もう黙れ」

深夜の公園で、二人は何度も何度もキスをした。

*

朝起きると、彼女はもういなかった。ホテルをチェックアウトし、駅に向かう前に、リヴァイは昨夜のファミレスをチラッと覗く。予想通り、彼女の姿はない。それはそうだろう——昨夜遅くまでシフトに入っていたのだから。「網走駅」と縦書きで書かれた、重厚な駅看板を横目に改札に入る。

今朝は、日差しが眩しいほどの晴天だった。昨日の大雨がまるで嘘のようだ。列車は運転を再開したもの、倒木があったとかで結局一時間ほど出発が遅れてしまった。

急ぐ旅でもない。リヴァイは、車窓からの晴れた風景を眺めながら、次の目的地へと向かった。

Sevendays Journey -リヴァイ・アッカーマンの旅紀行-

発行日 2025 年 8 月 29 日
リヴァイ中心 WEB オンリーHEYchooo!!にて展示
サークル ベルリン発ロンドン行き
著者 ペリコ
連絡先 berikotea@gmail.co.jp
X @beriko_tea
Pixiv @60700242

博物館 網走監獄



網走駅前からバスに乗り、どんどん山のほうへ進んでいくので不安になったリヴァイ。博物館 網走監獄へ辿り着くと観光客がたくさんいて安心した。チケットを購入し入場すると、「北海道開拓と監獄受刑者」をテーマにした展示が広がっていた。



重要文化財となっている「旧網走監獄 舎房及び中央見張所」は一番の見どころ。5つの棟からなり、放射状に広がる監獄は写真でも見たことがあったが、実際に一つ一つの独房を見ていくと、ここに囚人たちがいたことが感じられた。



▲コンビニに向かうため、網走川沿いの道を歩く。雨上がりの川はとても綺麗だった

Sevendays Journey



看守が見張るための中央見張所。放射状に広がる舎房の全部を見渡すことができる。体力に自信のあるリヴァイは、自分が囚人なら脱獄できるのではと想像した。



旭川への道、囚人ロードを行く！

網走からしばらく電
車に乗り、高速バス
で旭川へ向かう途
中、「囚人道路」を通
ることになった。囚
人道路とは、網走
旭川の道路のこと
で、網走監獄に収監
されていた囚人たち
が開拓を担ったため
そう呼ばれている。
旭川までの道には大
雪山があるため、切
り拓くのは本当に過
酷な労働だったらし
い。昨日の網走監獄
で最も印象に残った
囚人道路を通ること
となり、リヴァイは
当時に思いを馳せ
た。